

文化交流の灯を消さない

—「ロシア語映画発掘上映会」20回の軌跡—

守屋 愛 (『ロシア語映画発掘上映会』主宰者)

三年前の静かな幕開け

『ロシア語映画発掘上映会』は、新年 1 月 10 日の開催をもって、記念すべき第 20 回を迎えることとなりました。

最初の上映会を催したのは、今からちょうど三年前、2023 年の 1 月 8 日のことです。ロシアの国立映画保存機関ゴスフィルムファンドから、ミハイル・ブルガーコフ原作、ウラジーミル・ボルトコ監督の映画『犬のハート』の上映許可を得て実施したのが、すべての始まりでした。初めて上映会を手がける緊張感、お客様がくるのだろうかという心配、ロシア映画の上映が批判の対象にならないだろうかという不安。そうした当時の感覚は、今でも昨日のように思い出されます。もちろん、その時は、この試みが定期的な上映会としてこれほど長く続いていくとは、まったく想像もしていませんでした。

始まりは、極めて個人的な衝動に突き動かされたことでした。自分は映画に日本語字幕をつけることができる。上映にちょうどいい施設が借りられる。権利元に許可をとれば、上映もできる。「すべてそろっている。とにかく一度やってみよう」。そんな思いが、私を突き動かしたのです。上映権の申請から、字幕制作、会場の手配、広報活動、そして当日の運営に至るまで、すべてを自分で行うことになる。その大変さを漠然と想像はしましたが、それでも迷いより先に体が動いたのです。

この上映会を始めた背景には、私たちが直面した、日本でのロシア文化を取り巻く状況の急激な変化がありました。2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻、続くロシアへの経済制裁といった情勢の激変によって、ロシア映画の配給もほぼ完全に途絶えました。日本の映画館や映画祭のラインナップから、ロシアの名が消えていく。目前だったロシア映画の公開は延期になり、中には公開見送りとなったものもあるといいます。以前から関わっていたロシア映画祭も開催の見込みはなくなりました。スクリーンからロシア語の響きが消えていく。私はどこか現実感のない、深い喪失感を感じていました。

私にとって、ロシア映画が観られなくなるということは、単に娯楽の選択肢が減るという次元の話ではありません。長



年、ロシア語・ロシア文化を専門とし、ロシア語を大学で教える傍ら、翻訳や字幕制作を仕事としてきました。とりわけロシア語映画の字幕翻訳の仕事は、従事している人が少ないことから、仕事の対象である以上に、自分の社会的存在意義が実感できる、かけがえのない活動だったのです。

その活動の機会が突然失われたとき、私の中にぽっかりと大きな空白が生まれました。いつか状況が改善し、誰かが再び橋を架けてくれるのを待つという選択肢もあったでしょう。ですが、私は待つことができませんでした。自ら上映会を企画するという行為は、冷静な判断の結果というよりも、その耐えがたい空白をどうにかして埋めたいという衝動に近かったのだと思います。

字幕という職人的仕事

私にとっての「映画との関わり」の核心である、字幕制作という作業について少しお話しします。字幕制作は、かなり時間を必要とする、極めてストイックな仕事です。一つひとつの台詞を辞書的に訳すだけでは、到底字幕にはなりません。その人物の性格、置かれている状況、感情の揺れ、沈黙の意味、そしてカットの視覚的な要素までを考慮しながら、日本語として最良の形を探っていく必要があります。

しかも、基本的に表示時間 1 秒につき 4 文字と、限られた中で、どの言葉を残し、どの言葉を削るのか。もっと良い言葉はないか。この判断の積み重ねが、字幕の出来を左右します。言葉の背後にある広大な文化的前提や時代背景をどう扱

うかも、いつも問題になります。説明しすぎれば字幕が重くなり、削りすぎれば意味が薄っぺらになり、大切な意味が伝わらない。どちらも映画の作品そのものを損なってしまう危険があります。そのぎりぎりの線を探り、セリフをひとつひとつ積み重ねていく作業は、私にはひと針ひと針編み物を編んでいくような、静かで地道な充実感に満ちています。

昔の私はそうやって字幕を完成すれば満足していました。ですが、時を経て、今の私は字幕制作の完結に、もうワンステップが欲しくなりました。上映当日、大きなスクリーンで映像と字幕が重なり、観客の皆さんの反応や会場を包む空気を感じてこそ、初めて「字幕が生きる瞬間」を実感できるのです。上映会で、私はいつも会場の端に座っています。それは作り手として作品を見届けるためでもあり、同時に観客の一人として、皆さんと映画に反応する感情を共有したいと願っているからなのです。

支えてくれる手と、広がるコミュニティ

いわば孤独な情熱から始まった上映会でしたが、当然ながら私一人の力では、これほど続けられませんでした。協力してくれるすべての方に感謝してやみません。

まず、強力に支持してくれた家族の存在があります。精神的のみならず、経済的にも許容してもらえるのは、やはりありがたい環境です。それだけではなく、実は二人の子供が技術的な面で強力な助っ人になっています。字幕制作は、前述した翻訳作業に加えて、技術的な要素も大きな割合を占めています。ひと昔前はタイミング調整は別の人がやり、翻訳者は本当に翻訳をするだけだったようですが、私の場合はタイミング調整もちろん自分でやりますし、上映会の主催となってからはデータ管理、上映環境に合わせた形式変換といった、高度な技術も要求されています。この点に関して、私はとても運が良かったとしか言えません。すでに成人した二人の子供は、どちらも IT が専門で、アナログ人間の私からすればまるで魔法使いのように、すべての超難問を解決し続けてくれています。

とはいえ、アナログの世界もとても大切です。上映会当日の運営には、なんと言ってもマンパワーが必要です。会場準備、受付、機器の操作、来場者への対応。これらを献身的に手伝ってくれているのは、大学の元教え子たちです。すでに社会人となって、忙しいにもかかわらず、上映会のたびに集まって、力を貸してくれることは、私にとって何より心強い支えです。

集客の面でも、多くの方のお力を借りています。JIC 副会長であり、本ニューズレター編集長でもあり、ロシア映画祭 in 東京の実行委員長でもあった伏田昌義さんには、長年にわたり大変お世話になっています。ロシア映画祭 in 東京でのつながりを大切に、案内を当時ご参加くださった皆さんに届けてくださいます。また、目黒のアンナズキッチンをはじめ

めとする飲食店の皆さんが、ポスターやチラシを掲示してくださったことも、上映会を知っていただく大きなきっかけとなりました。

このように、この上映会は、外から見れば個人の企画に見えるかもしれませんが、実際には多くの人々の善意と献身的な手によって成り立っている「共同体」の活動なのです。

観客との対話で進む上映会

上映作品の選定において、私が一貫して意識してきたのは、いわゆる「定番の名作」をなぞることではありませんでした。むしろ、本国では広く知られているにもかかわらず、日本では紹介の機会を逸してきた作品、あるいは歴史の文脈に埋もれてしまった作品を「発掘」し、再び光を当てる場をつくることでした。

その代表例が、ソ連コメディ映画の巨匠レオニード・ガイダイ監督の一連の作品です。上映後の反響は大きく、「この映画を日本語字幕で観られるとは思わなかった、観られてうれしい」という声をいただいたとき、この活動の意義を改めて確信しました。

上映会が三年目に入る頃、私の中に一つの変化が生まれました。最初は「私が上映したいもの」が中心でしたが、次第に来場者や周囲の方々から寄せられるリクエストに応える形での企画が増えていったのです。マルレン・フツィエフ監督『二人のフォードル』、アンドレイ・フルジャノフスキー監督『一部屋半 あるいは故郷へのセンチメンタルジャーニー』、ゲオルギー・ダネリヤ監督『33』、ラシド・ヌグマノフ監督『針 REMIX』、今年 1 月 10 日上映の『411 - 非常事態』はすべてリクエストによる上映です。また、権利元からの提案で『1950 年代ソюзムリトフィルム制作 アニメーション特集』を組みました。

こうした過程を通じて、次第にこの上映会が主催者の一方的な発信ではなく、観客との対話によって形作られていく「場」であることを意識するようになりました。誰かの記憶や関心が次の上映を生み、その上映がまた別の誰かの記憶にまかれる種となる。もともと私の中でも、高校時代に観た『戦争と平和』や『モスクワは涙を信じない』が種としてまかれ、それが成長して今実を結んでいるのです。きっと、この上映会の種も、何十年か後に、花を咲かせ、実を結ぶと思っています。

2 月 1 日特別上映会の大きな決断

二十回という回数を重ねる中で、上映会の雰囲気も少しずつ変化してきました。初回から足を運んでくださっている方もいれば、そのときの映画に惹かれて初めて来場される方もいます。多様な動機を持った人々が同じ映画を観る。その多様性こそが、この場所の魅力です。

この上映会の今後については、正直なところ、まだ明確な